

「日々の理科」(第 1552 号) 2018 (H30), 10, 08

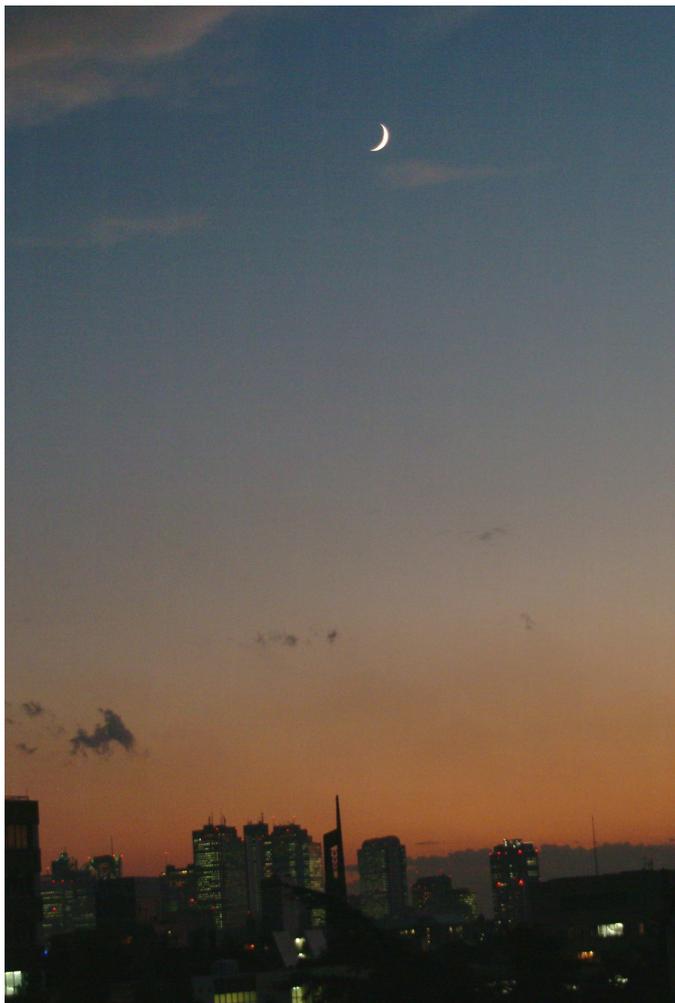
「二十七日月を撮る(1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

新月をはさんで数日間は、非常に細い月が見られる。「細い」というのは、見かけが細いだけであって、実際は球面である月面に、地球から見てほんの少ししか太陽光が当たっていないからだ。



新月から数日後の月が「三日月」である。「月の形」といえば、この三日月を描けば、誰でも間違いなく月とわかる。三日月は夕方の西の空に見え、日没後も数時間は見えている。その後午後9時ぐらいには沈んでしまう。「真夜中に三日月が見える」ことは日本では絶対にあり得ない。しかし、夕方かや夜の始めにかけて見え、都会でもよく見えるので、多くの人にとって、非常に馴染みのある月(の形)と言える。

逆に新月の数日前に見えるのが「二十七日月」である。形は似ているが、三日月が右下が光っているのに対し、逆に二十七日月は左下が光っている。



三日月とちがって、二十七日月はなかなか見る機会がない。未明の午前4時ごろ東の空から昇ってきて、その後太陽が昇ってくると、かき消されてしまう。多くの人の生活時間帯に見えないのだ。その二十七日月が、10月7日の未明に見えた。私は4年生の子どもたちに「早起きして見てみましょう。私は写真を撮りません」と、授業で約束してしまった。約束してしまったからには、何としても撮らないといけない。

10月7日の早朝、幸い北軽井沢は快晴だった。台風の影響で風が強いが、気温は20℃近くあって、寒くはない。私は車に必要なもの(三脚、カメラ、コロッケパン、お茶)を積み込んで、山荘から5分の「レタス畑の農道」に出かけた。



時刻は午前4時過ぎ。日の出にはまだ遠いが、観測対象の二十七日月はすでに昇っているはずである。残念ながら、東の空にわずかに残った雲に隠れているらしい。私は、しばらく待つことにした。